やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」（青森）発行

誌　　名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	23 / 2008 / 1-17
タイトル	青森の水環境座談会(中) 良水はアユ･イワナの宝庫
著　者　名	座談会参加者

青森の水環境座談会(中)

良水はアユ・イワナの宝庫、郊外の水環境

と　き：　2007 年 4 月 24 日　　ところ：　青森市長島養老乃瀧

出　席：

蝦　名　　憲（初代、昭和 5年生）　江　口 祥　一（ 3代、昭和 7年生）
五十嵐 正　俊（ 3代、昭和 8年生）　五十嵐　　豊（ 6代、昭和10年生）
徳　差 幸　広（ 6代、昭和11年生）　棟　方 啓　爾（ 6代、昭和11年生）
二　唐 寿　郎（ 7代、昭和12年生）　小山内　　孝（顧問、昭和12年生）
室　谷 洋　司（10代、昭和15年生）　山　道 忠　郎（14代、昭和18年生）
工　藤 芳　郎（17代、昭和22年生）　三　浦　　博（17代、昭和22年生）
石郷岡 總一郎（25代、昭和29年生）

室谷(司会)　前回は、ナマズなどはどこにでもいたとか、イガッタ(洪水)とき飼っている緋鯉とか金魚までが流されてきたとか、生活の身近にドジョウでもフナでもたくさんいたという話がでました。

町中の川には当然、生活排水が流れてくるので見た目には汚れていましたが、そこには有害な成分が少なかったので、工藤さんは金沢堰でも八甲通りでも海の開口部では 5、6 月ころアユの群れが川に入ってきたとも言いました。そうすると青森平野でもっとも大きい荒川とか駒込川の毒水、つまり強酸性水との関わりがどうなっていたのかが問題になってきます。青森市の郊外の川とか生き物を考えるうえで、この辺から話を進めたいと思います。

荒川、駒込川は毒水

江　口　　毒水というと、いまの荒川ですが大正 13 年までマスが上がっていました。そしてアユも。その後、地獄沼から毒水が流れ出てきて、その関係でダメになってしまったんです。この川は毒水が流れて全滅したということになります。

14代　山道

山　道　　いや、大正でなくて昭和ではないでしょうか。

江　口　　そう、正確にいうと、その(大正)あとちょっと良くなったんです。というのは毒水の処理をして一時、妙見までアユが上がっていました。それが、2 回目が昭和に地震があって完全にダメになってしまいました。その前までは荒川支流の横内川や合子沢川にもヤマメが上がってきていました。私は横内川上流の水源地でもヤマメが上がってきたのを確認しています。春の雪解け水のとき荒川をさかのぼって支流に入ってきたものと考えています。

五十嵐(正)　地獄沼の毒水を、溝を掘って地下に浸透させるという工事をしているようですが。

江　口　　ゴルフ場(八甲田カントリークラブ)の奥の八甲田霊園の向こうにすごい装置があって、そこで説明して貰いましたが、ボーリングして地下に流すようにしていました。また、ホタテガイを砕いて酸性の水を中和することもしているようです。

室　谷　　さっき江口さんが大正 13 年と言って、山道さんが昭和の 10 何年とか言いました。その辺の関係をもうすこし詳しく…。

17代　工藤

江　口　　地震で毒水が流れる水路が変わってしまったんです。これは調べればよく分かりますが、八甲田ホテルの下に新湯というのがあって、そこに「渡り鳥の湯」と呼んでいるところがあって、そこがすごくやられたんです。

工　藤　　昔、笑い話で、地獄沼のところに穴を開けたんだとか言われましたが。

江　口　　荒川は毒水ですがウグイは結構、酸性に強い魚でこの川でとれることがあります。

室　谷　　そうですね、私は荒川の中流の高田で育ちましたが、荒川から流れている川というか用水路でウグイを釣ったことがあります。1 回だけですが、中学生のころですから昭和 30 年あたり。高田と金浜をつなぐ金高橋というのが荒川本流にかかっていましたが、そこはこの辺の子ども達の水泳ぎの場所で、農家では馬を洗ったりしていました。その馬がマスを踏みつけてとったということがあり話題になりました。ときどき上がっていたのでしょう。

それでは、荒川が毒水になってから、この川と駒込川もアユなどは住めなくなったということですね。毒水については文献などで調べて詳しく書いておきましょう。

≪コラム≫　駒込川と荒川の毒水について

□　座談会終了後、さまざまな文献に当たった。「青森のみず－青森市水道八十周年記念史－」(杉見良作・和島善男、1989)から関連部分を抜粋すると、大要つぎの通り。

八甲田山系を水源として青森平野に流れる大小 60 の河川のうち、駒込川と荒川は毒水を含み、なかでも駒込川沿いの住民はそれに悩まされた。明治 33 年の試験成績では他の水田より 3 分の 1 の収穫しかなかったという。

駒込川の毒水対策は大正 9 年から諸調査を行い、昭和 6 年から小金沢地区へダムを建設したり荒川から揚水して毒水を希釈しようとした。これは昭和 15 年 10 月に完成したが、間もなく地殻変動が起き、ダムから水が漏れたり荒川に強酸性の水が流れたりした。荒川はもともと良水で数多くの魚が生息していた。

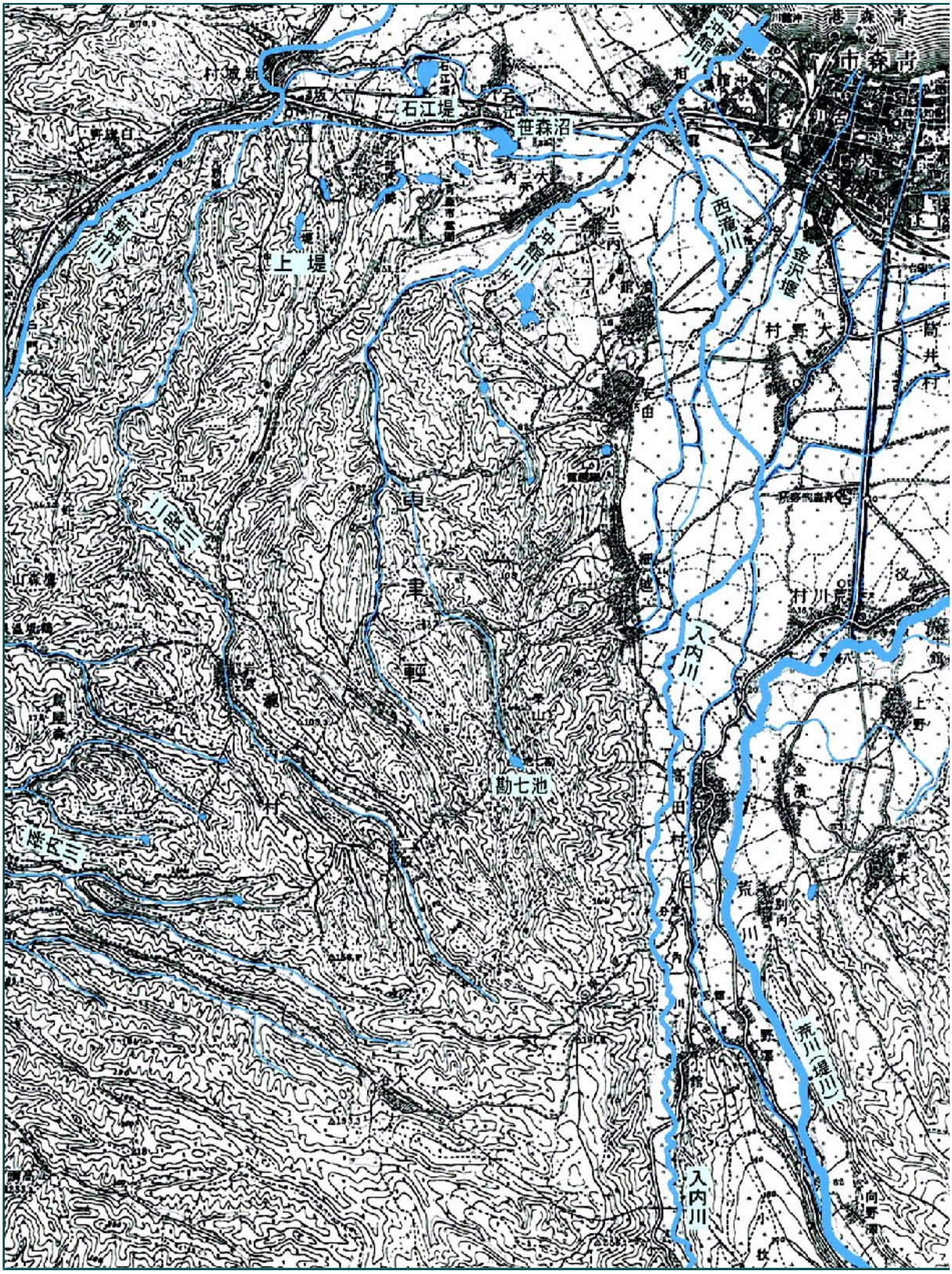
一方、これに加えて荒川の酸性化には地震による八甲田山系の地殻変動が関連している。青森地方気象台は昭和 8 年から 18 年にかけて地震を観測しているが、荒川が酸性化したのは昭和 15、6 年頃で、それまで閉ざされていた酸ヶ湯温泉の酸性水が同地の地獄湯ノ沢や新湯などから流れたことによる。昭和 19 年、酸性水を地下に浸透させ土壌中のアルカリ成分と反応させる方法が試みられたがうまく機能しなかった。さらに昭和 28 年から 35 年にかけて地下浸透法が行われたが、昭和 43 年の十勝沖地震で施設がこわれ、再び毒水が荒川に流れた。昭和 60 年から再度、地下浸透法が実施されることになった。

□　この後の「県営荒川地区鉱毒対策事業」について、「東奥日報」(平成元年 7 月 18 日付)では大要、つぎの通り。

この事業は昭和 59～61 年度調査、同 62～平成 5 年度で建設。荒川上流の酸ヶ湯、地獄沼、ふかし湯、新渡り鳥の湯、新湯の 5 か所の毒水湧出箇所から延長約 20 キロのパイプで中流部の向野沢地区に毒水を集め、地下 600～800 メートルまで掘った 140 本の穴に流し込むもの。地下浸透により酸性を薄める計画で、井戸水などに汲み上げる淡水層より深く注入するため生活に影響はないという。

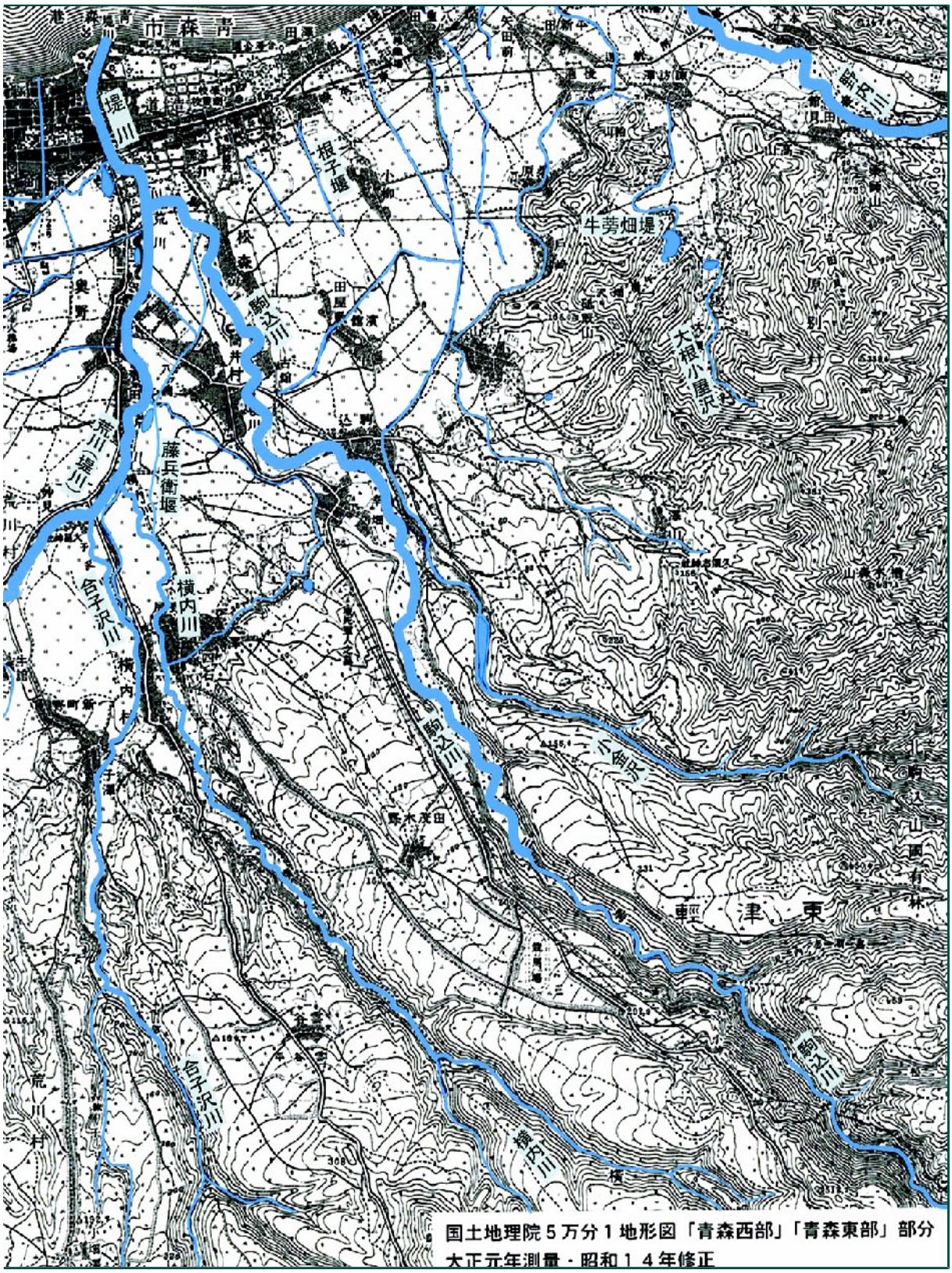
□　荒川の水は青森市の水道水として利用している。「青森市水道部ホームページ」によると、その後の処置は次の通り。

堤川浄水場(荒川の上流、向野沢に設置)は県営下湯ダム(平成元年完成)の放流水を水源とし配水能力は 61,000 立方メートル/日。堤川(＝荒川)は酸性水(年平均 pH3～4)の川なのでコンピュータによる水質の常時監視や薬品注入の自動制御を行い、市内南西部地区に配水。この堤川浄水場の処理システムに、アルカリ剤混和池があり、ここでは消石灰、ソーダ灰で pH 調整をし、さらに消毒、鉄、マンガンの除去対策をしている。



[図 1] 戦後間もない青森市の水系

昭和 14(1939)年の国土地理院地形図(「青森西部」、「青森東部」5 万分 1)をもとに河川、池沼を青色で示した。取材をもとに地形図に示されていないものも付加し、また必要と思われる地名も記した。元図は戦前だが、土地改良工事がまだ進んでいない時期であることから、水系などは戦後間もない頃の状況を示している。本図は水系の全体像を把握するために、川幅などは誇張して太く示している。



本誌 22 号(前号)8 頁には、この市街地部分を拡大して掲載したが、本図と合わせて見ると市街地の水系が八甲田山とか周辺の山岳・丘陵地帯からどのように流れてきたのかよく理解できる。取材をもとに付加した部分は青森高校がある筒井地区の昔の状況で(6 頁の徳差氏発言)、藤兵衛堰とか通称・三日月湖など。このように、とくに田園地帯には他にも多数の堰・水路が張りめぐらされ、灌漑用の池沼があったと思われる。

良水は西が入内川、東が野内川… 樋(とい)で平野を巡る

工　藤　　駒込川はもっと毒水が強いのですが梨ノ木の入口あたりでウグイをとったという人がいるんですね。恐山の宇曽利湖の強酸性でもいるんですから、毒水でもウグイは住んでいると思う。

室　谷　　ちょっとしつこいですが、工藤さんが八甲通りの川にアユが上がってくると言いましたね、いつの話?

工　藤　　小学校に入る前ですから、6 歳のときで、昭和 27、8 年。そのあともアユは上がっていました。

室　谷　　荒川の方は毒水になってしまったが、八甲通りの川には、昔からアユが上がってくる状況はあったということですね。

江　口　　その川は、青森の町中には田圃のずっと向こうから樋をつくって流れてきています。入内川からつながっているんです。

室　谷　　それでは荒川の毒水ではなく、良い水が流れていたということですね。その入内川ですが、あれはすばらしい川でしたね。私の生まれたところ(高田)を通ってきています。沖館川も良い川でしょうけども、入内川はずいぶん長く奥が深いんです。東側の良水には野内川があります。

五十嵐(正)　入内川は、沖館川もそうですが、樋をつくって立体交叉して水を流しているところが方々にあります。

3代　江口

江　口　　横内川の方も、本流のほかに、そこから別の水路をつくってずっと山側をまわしてきています。いまの水源地の上に水を取るところがある。その水がずっとあの辺の集落とか田圃を回って下の方に流れていて、この辺のひとは荒川とか駒込川の水を使っていなかったんです。

室　谷　　これで謎が解けますね。柳町の川とか八甲通りの川とか金沢堰とか、堤川から西側の町中の川は周りまわって入内川の方からきているんですね。横内川とか合子沢川は荒川に流れているが、そこに入るまでは良い水で周辺の田圃を潤していた。青森平野の東側一帯になります。野内川はさらに東側を潤している。青森駅から西側は沖館川の流域で、市内に入って海に流れ出る。ちょっとくどくなりましたが地形図(図 1)を見るとよく分かります。

五十嵐(正)　沖館川だと思いますが、安田のあたりを通っている水路がずっと続いていて、いま考えるとイワナがいそうなところがありました。それが小三内あたりで沖館川に合流していました。

室　谷　その東側では、入内川は西滝川に入っています。

五十嵐(正)　そう、結局はその西滝川も沖館川に入ってしまう。

母校・青森高校付近の昔の水環境

室　谷　　徳差さんは青森高校がある筒井に住んでいますね。昔は、あの辺はどうだったんですか。

徳　差　　私が住んでいた筒井は田舎でした。小学低学年の子ども達のフィールドは筒井とか奥野、浜田あたりで、ここには「五連隊」がありました。エイジョ病院と呼んでいた陸軍の衛戍病院もあって、白衣の松葉杖の戦病者が病院の空き地を散歩していて痛々しく思いながら

みることがありました。周りは全部、田圃。「筒井」はヤチ(葱、湿地)という意味があったそうで、明治の前は小さな集落で今の県道に沿って家がある程度。ほとんどがアシガヤだったと子供の頃、聞いたことがあるんです。

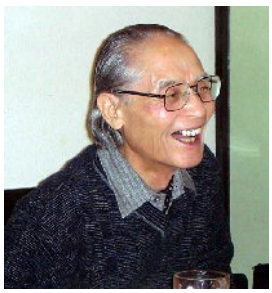
このヤチを田圃にするために新しく川を作ったのが徳差藤兵衛という人、それで藤兵衛堰です。一般にはシンセギ(新堰)と呼んでいましたが、横内川から引いてきて水が良いんです。魚や水棲昆虫などが多く、夏は水泳ぎの場所でした。

室　谷　　どのような魚がいたんですか。

徳　差　　シンセギは年２回の草あげ(除草)と稲刈りのとき上流をせき止める。このときがナマズやフナなどを捕まえる絶好のチャンスでした。

室　谷　　今は、周りが学校や住宅地が密集してしまっていますが、川はどのように流れてきたんですか。

徳　差　　この川は、横内川から分かれて、上流の方は浜田川(私たちは荒川をこう呼んでいました)と土手をはさんで並行して流れるところがあるんです。その辺りにヒョウタンの形をした沼があって、その北側に、中筒井方面から流れてくる小川が浜田川に落ち込むところが、大きさが直径 10m ほどの“滝壺”があったんです。この小川と交叉するシンゼキ、藤兵衛堰ですね、これにも水門があって滝壺に水が落ちる。ここはいまでも痕跡があります。小さくなってしまいましたがクズに覆われています。ちょうどここは、浜田川の土手が切れていて滝壺と浜田川本流が直結して深いんです。子供たちは近づけないところ。大人たちは、そこには絶対近づくな！　メンドツに「ダンコ(腸とか内臓)、抜かれてしまうぞ」と、よく注意されたものです。


6代　徳差

藤兵衛堰の話にもどりますが、下流は青森高校、筒井中学校の方、昔は五連隊ですね、そっちへ流ていくんです。今の筒井の県道を横切る東北本線のガードがありますね、そこに橋だけがまだ残っています。そこを、筒井中学校の東側に沿って本流が流れていきます。そして桜川団地に入る手前から何本かに枝分かれするんです。細流になって田圃に入るようになっていました。田圃を潤して最後は駒込川の晴雄橋あたりで落ちていくんです。記憶では枝分かれの１本は、青森高校の三四郎池の横を流れて荒川に落ち込んだようです。

それから、学校通りの「佐藤源のソバ屋」の向いから桜川団地に入るところは「ウラ門」と呼んでいました。ここに 3～4m 幅の木橋があって、その下で川ガニ(モクズガニ)を捕ったり、それがモジガニ(脱皮直後の蟹)でガッカリしてまた川に逃がしてやったりしました。三四郎池の横の小川のちょうど下流にあたるところの木橋です。

山　道　　そこの道路は、今のCoop前の通りでしょう。

徳　差　　そうです。

室　谷　　さっき大きい沼があるといいましたね、位置関係は。

徳　差　　今の筒井のユニバースのところから北へ約 300m、浜田川の土手沿いの東側です。大きい沼で、ここが私たち近所仲間の最も近い釣り場でした。春の増水期にはコイ、フナ、それに正式名は分かりませんがカジカ、ヌマエビ、ハイ(ウグイの稚魚？)釣りにはこと欠かないところでした。

山　道　　その沼は、三日月湖のことでしょう。高校のとき行ったことがあります。

徳　差　　沼は同じだと思うけど、子供の頃は名無しの沼で通用していました。ここで、メンドツの物語があるんです。

山　道　　メンドツも三日月湖にからんで聞いたことがあります。

二　唐　　メンドツというのは、落し穴のこともそう言った。

7代　二唐

徳　差　　西海岸出身のひとがカッパのことだと、深い海の方に遊びに行くと「メンドツにダンコ云々」と同じことをいわれたそうです。杉山(芬)先生に聞いたら、すかさずカッパのことだと答えていました。

五十嵐(豊)　青森では雪で作る落し穴のことをいう。わかられないように上面を作るのはなかなか難しい。

室　谷　　要するに、引き込まれる、引っ張られる、こわいもの、カッパということなんでしょうね。メンドツの話をしてください。こういうことは記録に残すことは大切なことだと思います。

土地の人がメンドツと恐れられた、カワウソ?を見たんです

徳　差　　1945 年の夏が終戦で、その前の頻繁にグラマンが飛んでくるようになった頃、多分 5、6 月だったと思います。そのとき友達 4 人で防空ズキンを背負ってその沼にフナ釣りに行ったんです。グラマンが飛んできて陸軍病院の自動車を機銃掃射するのを見て、防空ズキンをかぶってしゃがみました、釣りザオをかけたままで…。

そのとき私がちょっと頭をあげた瞬間、草むらに 80 センチから 1m ほどのメンドツが立ち上がって、キョロキョロ左右を見てからコチョコチョ歩いて、このように背中を丸めて直立したかっこうで沼まで 3～4m 歩きました。そしてドボーンと沼に跳ねたんです。

あっ、メンドツだと叫んだときには大きな波紋だけ。友達は波紋をみただけです。頭のサラとか足のミズカキは見えなかったが、確かにカッパだとそのとき信じていましたが、多分、カワウソではなかったかと思う。この沼は浜田川の「残存湖」で昔からのものだったから、異体の知れない生き物が住んでいても不思議ではないんです。

五十嵐(豊)　尻尾があったか見ていないのか。

徳　差　　見ていない。この沼を埋めたてたとき、馬鹿でっかいドロガメ(クサガメ)を捕まえたそうです。カワウソがいたといってもウソではないみたいな思いです。

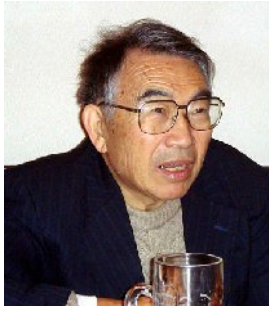
室　谷　　ずいぶん大きいですね。カワウソはイタチ科の動物ですが、直立してキョロキョロと左右を見回すとか、イタチ科の動物の特徴を示していますね。

入内川は河川改修で環境破壊

室　谷　　浪館とか細越は入内川水系ですね。さっきも言いましたが、青森の町中で堤川から西側はほとんど入内川水系になっている。

五十嵐(正)　そうです。ところがそれが河川改修で、今はまっすぐになってしまった。

室　谷　　すごいですよ。三面がコンクリートで固められて区画整理された田園地帯を真っ直ぐに流れています。その辺の航空写真があって、昔と今の姿が歴然としています。


顧問　小山内

五十嵐(正)　青森平野の多くは入内川でもっていたようなものです。

棟　方　　それ本当ですね。この水系は本当に面白い。パッと見ればみな荒川のように見えるがそうでない、市内の良いところはみな入内川が源になっている。

江　口　　そうです。それで河川改修でヤマメなんか今ではダメになってしまったんです。

室　谷　　ここにある空撮写真は昭和 50 年撮影です。ここが私が生まれた高田で、この辺が太陽台(空港下の新興住宅地)の造成中のところ、これが田圃で、この時点ではここまで区画整理が終わっている。こっちはまだやっていない。この辺が入内川、それがまっすぐになってしまって、この辺から荒川に流してしまったんです。青森の町中の川の流れ、位置関係は前回、詳しく図示して話しがはずみましたね。高度経済成長の急速な進み具合のなかで、田舎の水環境がどのように変わったのか、私はずっとそれを見てきました。それは長くなりますので別にまとめておきます。(次号に掲載予定)

五十嵐(正)　だから、その荒川放水路が問題なんです。荒川放水路を閉鎖して、入内川の水を西滝川とか沖館川に戻すと水量も多くなって川も良くなるんですよ。

誤った小学校副教材の記述

室　谷　　あのようにコンクリートになってしまうと生き物たちにはどうしようもないでしょう。

小山内　　それで今日、小学校五年生の副教材になっている「いのち育むあおもりの農林水産業(いのち育むあおもりの農林水産業編纂会(平成 18 年度版)」という副読本をもってきました。これをみると水田が命を育むどころの話ではないんです。このような話は差し障りがありますか?

室　谷　　そうは思いません。間違っていれば正すのが親切というもので、とくに子ども達の教材で誤っているのは問題です。キチンとさせてその関係者に知らせるのが大切なことです。この座談会は「やぶなべ会」会員だけでな

生物の生態系を守る

動植物の生きる環境を守ります

水路、水田、牧草地、森林などは、野生の動物や植物などが生息する環境をつくり、守っています。

また、青森県の美しい海で、計画的につくり育てられる漁業によって、魚や貝などの生態系が守られています。

魚のすみかとなる魚礁

水田に集まるさまざまな生き物

[図2] 誤った小学校副教材。掲載された写真のうち真ん中はアメリカザリガニと思われる。ニホンザリガニではない。外来種の掲載は、本教材の趣旨からして適当かどうか疑問。

く部外者も読んでいます。図書館などにも入っていますから。

小山内　そうですか。この本は田圃の自然を見ていないんです。とくに生態系について書いているところがひどい。

今の水田は、いのちを育むどころか、ドジョウもメダカもナマズもタニシもまったくいません。そのことに無自覚であることに先ず驚きます。今の田圃にアメリカザリガニ、トンボ、トノサマガエルが多く生息しているように写真が出ていますが、青森市内の田圃には、アメリカザリガニは全く棲息していないし、トンボのアキアカネのヤゴも見られない。トノサマガエルも本当に少ない。かろうじて油川方面では、秋にアキアカネが大量に発生していますが、野木和湖、大堤、板野堤などの溜め池があるからです。アメリカザリガニが仮に新しく合併した浪岡地区や周辺にいたとしても、有害な外来種の存在は自然の豊かさにはなりませんよ。

田園地帯では真っ直ぐな川に水路を整備し、1 ヘクタール水田化を推し進めている。いのちを育むどころではない、悲しいくらいです。

棟　方　放送の間違いも大いに指摘した方が良いと思います。「やぶなべ会」も NHK などと話し合いをもっても良いのでは。今の NHK は非常におかしい。NHK のホームページを見ていれば視聴者を大事にしているようですが、放送していることで誤りがあるとか疑問点があって、そのことを個人で指摘してもとりあってくれません。門前払いを食う。こっちは怒り心頭。けんか腰になってもしようがない。とくに自然関連の番組についてもっとなんとかならないものか。デレクターなどにきてもらって「やぶなべ会」と意見交換会を開くとか。

6代　棟方

小山内　番組をつくっているひとが自然をよく知らないんでしょう。

山　道　そう、番組づくりを進めるひとが、あまり知らないですよ。だといってそのままにしておくのもちょっとまずい。

江　口　焼き物などの番組でも、人の顔ばかり写しています。我々は手元を見たいんだけど、顔ばかり。編集の仕方なども自分のイメージでやってしまう。

棟　方　確かに NHK テレビには各分野で優れた番組が多いです。しかしそうした優れた番組と地方局の自然関連番組との落差があまりにも大きいね。適切な季節感のある映像を通して、健全な自然観を涵養するビジョンがほとんど感じられない。例えば横浜町の「菜の花祭り」は毎年のように放映するが蔦の森や八甲田の素晴らしい旬のブナ新緑等をタイムリーに放映することはほとんどない。たまに放映しても誤りが多い。NHK テレビは影響力が大きいだけに、もっとしっかりしたビジョンを期待したいと思うのだが。

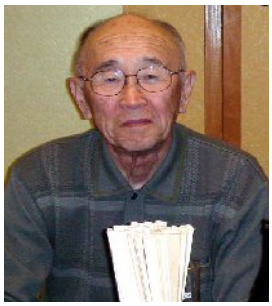
石郷岡　結構、東大とか京大とか終わっているひとが多いらしい。なんですが現場を知らないで、頭ばかりでやってきているというか。

小山内　単なるキレイ、綺麗ですね。

棟　方　非常に情緒に流されている。委員会みたいなものを作って、ときどき自然番組などについて意見交換をした方が良いと思うんですが。「NHK ふれあいミーティング」は絵に描いた餅ではないでしょうか？

蝦　名　プライドがあって、その辺が難しいのでしょう。

農薬で川魚が浮いて流れる… 野内川水系


初代　蛯名

室　谷　　前回、イナゴなどが田圃から消えてしまった、ということについて、五十嵐(正)さんから農薬、アルドリンなどドリン剤の影響という話がありました。とにかく残効性がありすぎて何もいなくなってしまったと。

江　口　　私はその頃、野内の方にいました。人手で田の草取りをやっていましたが、そのあとが除草剤を使うようになりました。それで生き物の影が見えなくなってしまったんです。

棟　方　　あの野内川でいっぱい魚が流れてきた話を聞いたことがあるけど…。

江　口　その薬をまくようになってから、ワラハド(子どもたち)を連れて行って魚をバケツに何杯もとる。貴船川もそうでした。貴船川では、すっかり腹を出して浮かんで流れてきました。

棟　方　　まさに時代の転換期であったと思いますね。

江　口　　東岳中学校に行った(赴任)のは、昭和 35 年でした。近くの川にアユはすごくいました。5 月頃小さいのがあがってくるんです。傘をもって行って、それでナンボでも(たくさん)とってきました。田圃に水を入れる堰があって、そこを止める段がありました。そこに傘を置くと帰り際に跳ね上がったアユが 30 匹ほどもたまっていました。晩酌のあるときはそのようにしてとるんです。

　またすごい量のアユが流れてきたことがありました。農薬にやられたんです。下で止めてバケツに何杯もとりました。しっかり洗ってエラのところを切って食べるんです。学校で女の先生が洗ってフライにして調理してくれるんです。

室　谷　　それは、ナメ流しでないですか?

江　口　　いや農薬です。上流の方に三本木という集落があって、そこにリンゴ園がありました。5～6 月になるとスピードスプレーヤーで広範囲に農薬をまくんです。そのあと、農家のひとが川にきて機械(農機具)を洗うんです。すると、すごい量のアユが流れてくるんです。

小山内　それはナメ流しと同じですね

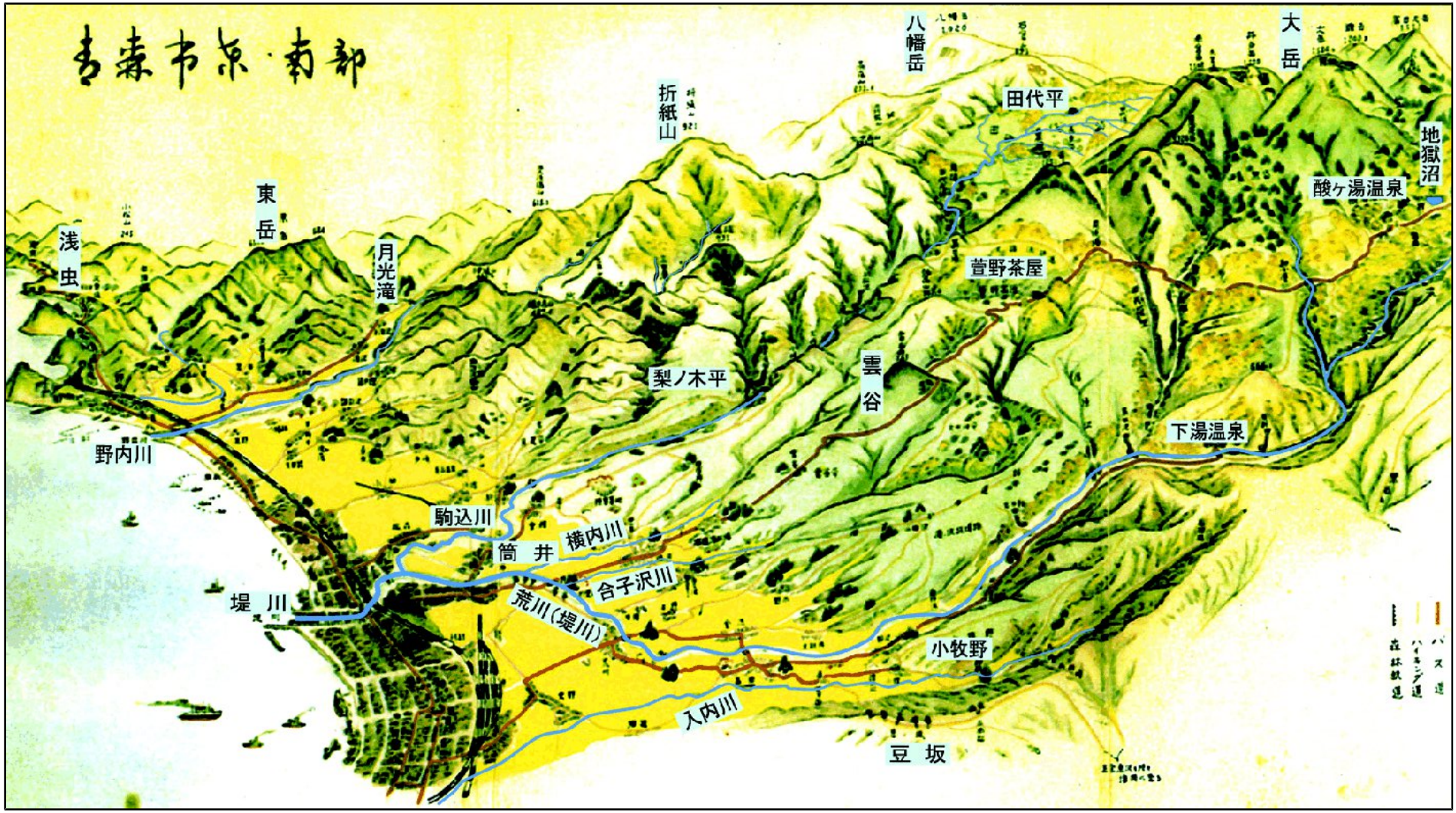
江　口　　生きたまま流れてきて苦しいのでオガ(地上)に上がってしまうんです。それをマデに(丁寧に)洗って…。とにかくすごかったものです。

五十嵐(正)　前は東側の川でもヤマメがとれたでしょう。どこの川でしたか、小さい川でしたが。ホタルもずいぶんいました。

江　口　　あの辺は、野内川水系が一番だったんですね。それから学校の近くに「大鱒」という屋号の家があって、どういうことですかと尋ねました。すると大きいマスがそこの家の裏の田圃にいっぱい上がってくるそうです。春になると上ってくるんですね。それでそのような屋号になったそうです。とにかく田圃の水は綺麗でした。

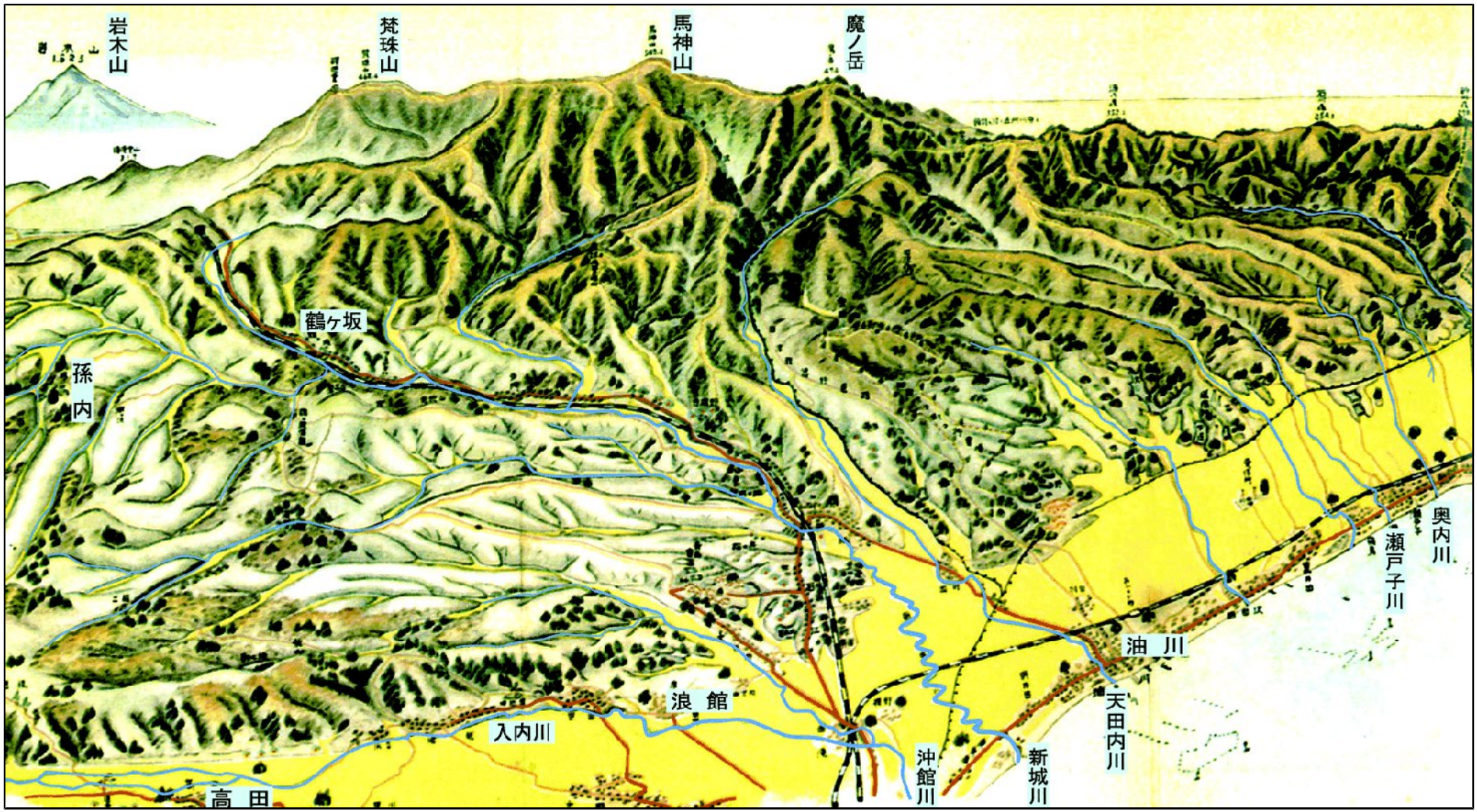
　それから、さっき駒込川の毒水の話がありましたが、近くに原別というところがあって、ここは昔、駒込川の毒水でずいぶん困ったそうです。そこで斉藤武兵衛というひとが別の川から水を引いたそうです。良い水を引いたんです。それから原別の水田は良くなったそうです。武兵衛堰というのがありますがそれです。

小山内　宮田の方で、わたし生徒と一緒に行ってウグイがものすごくとれたことがありました。ホタルもいっぱいいて。



[図3] 戦後間もなくの鳥瞰図に見る青森市東部・南部の水系

「祝町村合併記念・青森市新観光地ハイキングコース全図」(1955)をもとに、河川を青く塗りつぶし、位置関係を分かりやすくするために一部地名を付記した。この地域の主要河川は、八甲田山系を源にした荒川、駒込川で、これらは合流して堤川となり青森湾に流れ出る。(近年、荒川は堤川と呼称)荒川の支流としての横内川と合子沢川は豊かな生態系をかたちづくっている。さらに絵図左側上の野内川と右側下の入内川も水生生物が豊富である。絵図右側中ほどの下湯温泉は今はない。同じく下の豆坂は現青森空港の位置。



[図4] 戦後間もなくの鳥瞰図に見る青森市西部・北部の水系
「祝町村合併記念・青森市新観光地ハイキングコース全図」(1955)をもとに、河川を青く塗りつぶし、位置関係を分かりやすくするために一部地名を付記した。この地域の主要河川は絵図右側(位置的には北側)から、津軽半島中山山脈に源をもつ奥内川、瀬戸子川、天田内川など。さらに絵図左側(位置的に西側)から流れる新城川、沖館川など。沖館川は入内川と合流。いずれも生態系が豊かで青森湾に流れ出る。「沖館川」の文字部分から森林軌道を示す線が伸び、途中で分岐している。

江　口　　あの川はこの前、行ったら完全にコンクリート化して駄目になっていました。

二　唐　　前回、私が高校時代まで住んでいた浪打の根子堰にアユが上がってきたとかナマズがたくさんいた話をしましたが、この前、50 年ぶりで行ってきましたが両岸がコンクリートで生活配水で汚れてしまっていました。ここは武兵衛堰よりも西側にありますが昔は澄んだ良い川でした。

南へ 500 メートルも行けば田圃が広がり、田圃に水を入れる幅 50 センチくらいの用水路にはメダカが群れをなしていました。水面にはサンショウモがたくさん浮かんで、水中にはタヌキモが揺れていました。根子堰にはトンボも多く当時はカワトンボと呼んでいましたが正しくはハグロトンボですね。イトトンボのことをカミサマトンボと呼んで、これを捕まえると神様の罰があたるといって、あまり捕まえませんでした。秋になって顔の赤いのは「酒飲みトンボ」、羽の端に黒い模様があるのは「車トンボ」などと子どもなりに区別していましたね。

五十嵐(正)　とにかく、環境がおかしくなったのはコンクリートの影響です。それともうひとつは石油化学の結果、プラスチックの発明でしょう。これで環境をものすごく悪くしました。

江　口　　いわゆるゴミですね。

各所で「ナメ流し」が横行

室　谷　　そろそろケモノの話にいきませんか。また魚に戻ってもいいですから。

五十嵐(豊)　ナメ流しがあります。私はやったことはないけども、あれは記録をしておく必要があります。

室　谷　　恐らく皆さんはやったことはないでしょう(笑い)。ですが山で仕事などをして目撃とかはあるでしょう。これは是非とも記録をしておく必要があります。

五十嵐(豊)　私は疎開で岩木川の近くにいました。1 年もいなかったのですが、村中が、河川の沿岸というか総出でやっていました。カーバイトとかを使っていました。

江　口　　東岳にいたときは、サンショウの皮を剥いでやっていました。イワナをとるとき小さい沢がいっぱいあり、樺ハギ沢などではよくやっていたようです。

10代　室谷

五十嵐(正)　それは小規模なやりかた。

五十嵐(豊)　そんなケチなものではない。岩木川だったと思うが、これはでっかい川で、コイなどがプカプカといっぱい浮いていました。

五十嵐(正)　硫酸銅、ボルドー液ですね。これも使ったのでは。

室　谷　　つまりは食べるためにやったんですね。

五十嵐(豊)　それはそうです。焼いて食べた。戦争中も戦後も。とにかく私たちガキの頃で、プカプカ浮いている魚を一生懸命とっていた記憶があります。見たのは 1 回か 2 回ですが、そこではずっとやっていたようです。

室　谷　　味の記憶は?

五十嵐(豊)　それはない。とにかく村中総出で、オヤジも子どもも出てきて、コイなどをいっぱいとっていました。岩木川だったか十川だったか、とにかく岩木川水系でした。

棟　方　　ナメ流しの話になれば一晩、二晩はかかる。あまり言わない方が良いと思いますが。

室　谷　　歴史での事実ですからこの際、記録をしておきましょう。

棟　方　　青酸カリまで使ったんですよ。

全　員　　どこでですか?

棟　方　　場所までというと困るが、記録だとなれば明かしますが内真部の川ですよ。下流で水を飲んだりと考えれば心配になりますね。奥内の川です。

室　谷　　魚は何ですか？

棟　方　　イワナです。とにかくクルミだとかサンショウなどは効果はない、ハッキリ言うと。シビレルから効果があるがすぐ生き返ってしまう。捕まえるところまでもたない、本当は。だから土木業者なんかはスゴイことをするんです。ダイナマイトを使う。バーンと、彼らは。

五十嵐(豊)　ダイナマイトは流れていかない滝壺なんかでやるんでしょう。ナメ流しは流しだから上流でやってずっと下流の方まで効果がないと。

6代　五十嵐

棟　方　　個人的にやるのであればカーバイトを使うでしょう。昔は、操車場のところに行けばカーバイトの余ったのがいっぱいありました。それから大規模にやるのは電気。バッテリーでやる。バーンとやる。電気ショックですね。

室　谷　　それも奥内の川？

棟　方　　いや、八甲田山系です。みんなやっていたと思う。方々で見ています。それも地元の人がやっていて、もっとも工事関係者が多い。

室　谷　　ヨソから来たひと？

棟　方　　いや、地元のひとが工事を請け負っているから、地元のひとです。

工　藤　　わたし聞いたのは飯場で食料、メシのおかずとしてとってくるんです。彼らのタンパク源ですよ。

小山内　　夕食の楽しみなんですね。

五十嵐(正)　プロの研究者が調査のために電気ショックを与えることがありますね。

室　谷　　それは、どの辺まで効き目があるんですか。またどの程度の影響が？

五十嵐(正)　電極と電極の範囲内です。

室　谷　　広範囲であれば相当の電気を使うでしょうね。

五十嵐(豊)　ちゃんと正規の電気器具があるんです。それは研究上のことなんですよ。あまり面積の広いところではやれない。滝壺なんか狭いところで、イワナが何匹住んでいるかとかを調べる。

　まず何匹か釣って、そのあと電気ショックを与えて気絶させる。それで何匹いるかを数える。そうすると、今度は釣りだけで個体数を予測して調べることができる。確か、電気ショッカーとかいっていました。

全　員　　あまり効けばダメなんですね。

滝の上にイワナ放流… 横内川源流

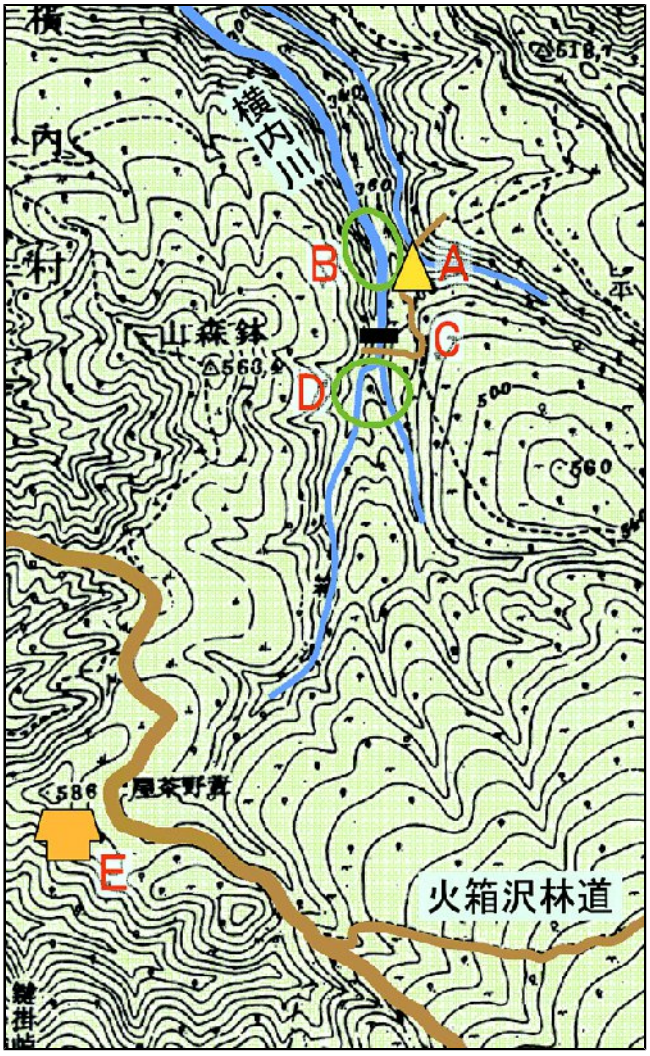
五十嵐(正)　工藤さんなんか、ずいぶんあちこち歩いているでしょう。

工　藤　　歩いたけども最近はあまり…。私、毛バリなんです。あまり藪沢に行けない。鯵ヶ沢とか野内川は行きますが。ここ 20 年はあまり参考になりません。横内川はまだ良い方です。合子沢川は、育樹祭開催のとき道路が舗装されてしまったりで壊されてしまいました。大星神社の近くでは今でもイワナやヤマメをとったりしている。合子沢の釣り大会で逃げたニジマスが釣れたという話もあります。

五十嵐(正)　江口さんなんかは、ずいぶん釣りに歩いたでしょう。

江　口　　青森近郊は全部歩きました。色んな川の滝の上とかも。これは昭和 38 年のときの話ですが、私が 30 年代に放したイワナが横内川の滝の上にすごかった。しばらくぶりでそこに行ったんですが、どういうわけか全然釣れない。ちょうど火箱沢林道をつくっていたときで、人夫が茶屋の向かいに飯場を作っていて、釣り仲間とそこに泊めて貰いました。そしてその日はナンぼしても釣れない、と人夫に話したら、誰が放したかわからないが火箱沢の川の中をネズミが走って歩く。ネズミが川のなかを走って歩くわけがない、みな 30 センチ位のイワナなんだ、と言う。何匹とったか、と聞いたら 380 匹以上とったと言う。それで、それは全部、ワ(私)が昔、放したんだと話してやりました。

そのとき、昭和 30 年代初めですが、私は横内川の上流にテントを張りました。夜にカンテラをつけて歩くと虫が寄ってくる。するとイワナが足にぶつかってきて、ニョロニョロと。それを毛針でパッパッと 50 匹くらい釣ってしまう。それを網に入れて川の中に沈めておいて、朝早く行って、ズックでできた袋に入れて背負ってくる。それを滝の上に運んで放したんです。ずいぶん増えたんですが、その後は釣り人がたくさん入って、今は全然ダメでしょう。



[図 5] 横内川源流の滝の上にイワナ放流。昭和 30 年代初め横内川源流にテントを張り(A 地点)、すぐ下の源流(B 地点)で多数のイワナを釣った。翌朝、袋に入れたイワナを背負って山道(C 地点)を滝の上に登り、イワナが住んでいなかった滝の上部(D 地点)に放流、その後、大繁殖。昭和 38 年に萱野茶屋の飯場(E 地点)に泊まったとき、工事の人夫がいっぱい釣って食べたと話した。

全　員　(ため息)

小山内　　火箱沢林道の話をすれば、ナミウズムシというプラナリアがいますが、萱野茶屋のあたりにもナミウズムシがいました。いまは全然、見えなくなってしまいました。何年前か覚えていませんが、15 年くらい前かな…、3 種類くらいあの沢にいましたが、今ではプラナリアが全然ダメになってしまったんです。

江　口　　カンテラを使って歩いた頃、あの辺の生き物は一番でした。

棟　方　　ちょっと詮索したいところがあります。いま、逆川の上流を調べています。なぜかというとガジャボチに 1 日で行くコースを探しているんです。ここからの風景を描きたいというひとがいてガイドをしたい、と。このひと達は横岳からは行っています。横岳から行けば 1 泊しなければダメですね。

江　口　　いまは開墾から行っているでしょう。5 年前に 1 回、行きました。

棟　方　　開墾というと沖揚平ですね。そこから横沼までは行けます。そして横岳に登って、ということになりますが、なかなか大変です。

江　口　　それはそうだ。

棟　方　　逆川の支流の横岳沢があって、そこにイワナがいるかどうか。

小山内　　いると思います。

工　藤　　逆川自体にはいるんだから。

棟　方　　横岳沢にはバイカモというのがすごいんだ。それがチトセバイカモなのかどうか今、調べています。イワナがいるんだと誰にも知らせないでオレだけで釣りたい(笑い)。

3代　五十嵐

五十嵐(正)　酸ヶ湯の下に新湯がありますが、あれから上(上流)の方にはイワナがいますね。

江　口　　温泉が湧いている所があって、それから上の方には確かにいます。

工　藤　　小さい沢にも結構、いい形の魚が釣れます。

ムラサキイガイは何時、陸奥湾に定着？

室　谷　　ほかに話題がありませんか。

江　口　　これはちょっと別の話になんですが、ムラサキイガイがいつ陸奥湾に定着したかについて。いわゆるムール貝ですね。

青森市の広報で沼宮内先生がこのことを解説したことがありました。それについて私は電話で、まったくウソだとしゃべったんです。沼宮内先生は自然関係の委員長のようなことをやっていて、「広報あおもり」に「ムラサキイガイがずっと昔からいる」と書いている。これは、私はウソだと思っています。昔、母親と合浦公園に行ってアサリとかさまざまな貝をとりましたがムラサキイガイはひとつもいなかった。よく似たシウリガイはあった。終戦前だった。その後は、私は色々と調べました。浅虫の臨海実験所では昭和 24 年にムラサキイガイが陸奥湾に定着したと文献に書いてありました。ホタテの養殖に関する文献だったと思う。それからとったかたちで別の本にも書いてありました。確か、陸奥湾に地中海からアメリカの軍艦がきて、合浦公園に上陸したときがあり、このときに船に付いてきたものではないかということでした。

さらに色々と調べましたが、ムラサキイガイが横浜に定着したのは大正 12 年ということが分かりました。それは、やはり外国船に付いてきたもの、と文献に書いてありました。青森の場合は、昭和 20 年 8 月に軍艦がきて、「ワイルドキャット」と呼ばれる日本人の 2 世を乗せた船で、それが地中海からきたというのがちゃんと文献に残っていました。それで陸奥湾に定着したのが昭和 24 年だと判断されているんです。そこで私は沼宮内先生に、昔からいたのではないと言ったのです。

もう一つ、沼宮内先生は「この辺の漁師はシウリガイのことをマルゴと言っている」と広報に書いていました。私が漁師から聞いたのはムラサキイガイのことをマルゴと言っているんであって、シウリガイはマルゴではないと話したんだ。そうしたら先生は「私が上磯で聞いた話は違う」ということで、それっきりになりました。私は浅虫に行って臨海実験所で 4 日間も泊まって調べたのは、中学校の教員のころで昭和 40 年代初め頃だったと思います。

室　谷　　私は昭和 35、6 年の頃、あそこの臨海実験所で実習を受けました。仲間とムラサキイガイをとってきて煮て食った。「イガイと美味いな」とみんなで言ったりして。(ちょっと間をおいて、笑い)

江　口　　われわれも食べました。

室　谷　　そのとき沼宮内先生は臨海実験所にいましたよ。

江　口　　ですから、沼宮内先生はそこにいたんです。先生、分からないんですか、と言ったんです。その後の結果について私の方には全然ありません。これ、もう一度、キチンと調べておかないと。

小山内　　そのことは違うと思うよ。ムラサキイガイはものすごく古い時代にやってきているのではないかと、帰化的には。

江　口　　それまでは全然、文献にも載っていないんです。昭和 20 年前までは全然なかった。母親の実家が清水川で、近くの合浦公園にはよく行ったがいなかったんです。

棟　方　　さっきから話したいと思っていたのは、今まで食べる話をしてきましたが、海の貝としてはカラスガイを食べました。カラスガイがムラサキイガイでしょう。オレ達、腹がすくから食べたわけ。小学校 4 年生のとき、ですから昭和 22 年の頃。

小山内　　戦前だと思いますよ。

江　口　　戦前は食べたことはないな。シウリガイですよ、それは。

棟　方　　オレ、カラスガイなのかムラサキイガイなのかシウリガイなのか、よくは分かりません。食べていればそれで良かったから。アカザラはカラスガイより美味しかったのでよく潜って採りました。

江　口　　シウリガイというのは、ちゃんと真珠層があるんです。貝自体の構造が違う。ムラサキイガイというのはムール貝とも呼ばれる。シウリガイは深いところにいて、岸壁の上に出るのはムラサキイガイとムラサキインコしかない。シウリガイは、その上に出ることは絶対ない。

室　谷　　なかなか考えがいろいろあって意見が合わないようです。非常に身近な貝で、青森湾にいつ定着したかは重要なことだと思う。もっとよく調べて原稿にしてお願いします。

石郷岡　　皆さん、これ大事なので是非とも、会報にまとめて頂きたいと思います。

25代　石郷岡

室　谷　　いま真珠層の話が出ましたが、五十嵐(正)さんがまとめた資料(表。次号に掲載予定)にはカワシンジュガイが載っています。？マークが付いて。これは岩手県では方々の川に住んでいますが青森ではどうなんですか。海から川の話題に戻しますが。

小山内　　カワシンジュガイは青森では確認されていません。

五十嵐(正)　オレも見たことがないから、何か情報がないかと思って資料に載せたんだ。

小山内　　阿弥陀川の上流にいる、と聞いたことがあるがまだ見ていません。

(以下次号に続きます)